

F o r e s t 通 信

4

林野庁 関東森林管理局 高尾森林ふれあい推進センター No.293

巻頭 photo 高尾山の生き物たち



ルリタテハ(タテハチョウ科)

うらかな陽光に誘われて木下沢に出かけた4月初旬に、約半年ぶりに、ルリ色の帯が特徴のルリタテハに出会いました。このチョウは、成虫で越冬をしていましたが、温度の上昇とともに目覚め、なわばりの林道で「日向ぼっこ」をしているようでした。

これからは山野草、野鳥、昆虫の本格的な観察シーズンですが、思いやりのある心で接したいものです。

(写真・文 大作栄一郎氏)



アブラチャン(クスノキ科)

本州、四国、九州に分布する、高さ3～6mになるクロモジ属の落葉低木です。早春の3～4月、葉に先立って淡黄色の花をつけ、枝や実独特的な芳香があります。

アブラチャンのアブラは「油」、チャンとは「瀝青(タール類)」のことです。樹全体に油分が多いため、昔は幹を薪炭として使ったり、果実や枝から油を採って灯油として利用していました。

春、まだほかの草花がほとんど芽吹いていない森の中で、ひそかに咲いた黄色い花が目立つ樹です。

いろはの森

裏高尾には日影沢から山頂に至る「いろはの森」の登山道が整備されています。ハイカーに文学的な遊び心で森を楽しんでもらうために、いろは47文字をそれぞれ頭文字に頂く樹木を紹介する仕掛けがあります。

さて、いろは歌は、いろはかな47文字を一回づつ使った歌として有名ですが、改めていろは歌の意味を詮索(検索)してみると、次のようにネットでは紹介されていました。

文は「色は匂へど散りぬるを、我が世誰そ常ならむ、有為の奥山今日超えて、浅き夢見じ酔いもせず」だそうです。

意味は、「花が匂う(咲く)ようでもすぐに散ってしまうように、この世の中にずっと同じ姿で存在し続けるものなんてあり得ないよ。愛や憎しみのいろいろが渦巻く険しい山道(人生)を今日もまた一つ越えたよ、はかない夢は酔いもしないでは見たくないものだな」、となるそうです。

小生も社会人として、公僕として夢を追いつつ、日本やアジアの森の山坂を越えた、37年間の役人生活が終わります。森作りは国家百年の大計と言われます。ぜひ、みなさんの叡智で高尾の森が悠久であることを願ってやみません。多謝。(田中昌之)

●高尾森林ふれあい推進センターは、皆さんが高尾山の自然に親しみ、森林や林業に理解を深めるための諸活動を行っています。



森林カレッジV 「炭焼き体験」

平成25年3月9日(土)、森林カレッジV「炭焼き体験」を開催しました。講師に杉浦銀治さんをお招きして、炭に関する講義と、伏せ及びドラム缶による炭焼き実技をおこないました。

午前中は、4班に分かれて炭材の窯入れから着火、熱分解が進むまでの行程を体験しました。カレッジ生は煙に悪戦苦闘しながらも、一生懸命焚き口の火をあおいだおかげで、窯内部の温度が順調に上がり、燃焼が安定しました。その間を利用して、手作りの竹細工を作りました。昼食には、各自が竹で作った器や箸でみそ汁を食べ、日常とはひと味違った時間を楽しみました。



午後からは「炭焼は地球を救う」と題して、杉浦銀治さんによる講義を受講しました。一口に「炭」といっても、様々な種類があること、「多孔質」という最大の特徴を活かした効能が多岐にわたること、国内のみならず、アフリカや東南アジアの国々で炭焼の技術指導をおこない、資源の有効活用や農地の土壌改良が進んだことなど、杉浦さんがこれまで60年以上にわたって炭の研究に携わり、積み重ねてきた実績に基づく話に皆さん真剣に聞き入っていました。

講義終了後は、モミジバフウやツバキの果皮などを材料に花炭作りをおこないました。また、杉浦さんの指導の下、「炭団(たどん)」づくりもおこない、盛りだくさんの内容となりました。



当日は、今年度の森林カレッジの最終講座でもあったため、平成24年度の森林カレッジの閉校式も行いました。参加者一人ひとりに修了証および受講証明を授与したのち、カレッジ生代表から、1年間を振り返っての感想等を発表していただきました。また、アンケートからは、「夏の暑さも冬の寒さも森林を育て、人間もそこに関わっている、万物が活かされていることを実感した」「森林での実際の作業を具体的に知り体験できたことは大変参考になった」「カレッジに参加する前は、割り箸を使わないのが森林を守ることだと誤った認識をもっていたが、(カレッジに参加する中で)はば広い知識を得ることができた」等、この1年間の経験が、カレッジ生の森林・林業への理解や自然への接し方が、より明確になるきっかけとなったことがうかがえます。森林カレッジの目的が果たせたことをうれしく感じました。



また、「毎回得るものがあつた。今後機会があれば勉強したことを少しでも役立てたい」「自然と共存する森林の仕事に興味わいてきた。これからもボランティア活動等機会があつたら参加したい」「森林を育てることの楽しさをわずかながらでも実感できた。これからもどこかで関わっていきたい」等、カレッジでの経験を今後に生かしたいという感想もみられ、森林・林業、国有林の応援団として国民参加の森づくりの広がりを期待したいと思います。

🌸 思ったよりたくさんできたかな 八王子市立 上川口小学校



収穫した竹炭をシートに広げて運びます

冬晴れの2月26日(火)、27日(水)の2日間、例年のことながら少数精鋭で炭焼き体験を行う上川口小学校です。当初は4年生から6年生の20数名で行う予定でしたが、挨拶の後、2窯に分かれて窯に竹を積む作業をしていたところ、1年生が見学に来てきました。みんなに「竹をどんどん持ってきてー」と言うと、何と！見学のはずの1年生が、その小さな手と身体に持てるだけ抱えてやって来ました。ゆっくりと竹を積み上げてあげると、また竹を取りに駆けだして行きました。あっという間に準備が整い、着火作業へ。何だかんだで12時になり、生徒の皆さんは給食へ。

翌日、「炭の話」をした後にいよいよ窯出しです。土をよけ、トタンを外すと窯の中には竹炭がびっしりと。頑張った生徒の皆さんも先生も大喜びでした。

🌸 グリーンサークル「高尾山国有林見学会」が開催される



出発前の自己紹介

春一番の強風が吹き荒れた3月1日(金)に、日本森林林業振興会のグリーンサークル会員30名が集まり、高尾山国有林見学会が開催されました。

はじめに、センター展示室でDVD「いのちの森 高尾山」を鑑賞した後、所長より藩有林から社寺有林、その後御料林や国有林への高尾山の所有の変遷をはじめ、植物相やブナの生態など、冷温帯と暖温帯の植生が見られるなど、貴重な自然が豊かであることを紹介しました。

観察会では稲荷山コースを登り、国有林と民有林を観察しながら、御料林時代の境界標と現在の境界標の区別、人工林の手入れの違い、国有林の百年生複層林等を観察しました。山頂を経て開山

744年の古刹、薬王院有喜寺で精進料理の昼食を取り、林野庁慰霊碑で国有林野事業の殉職者を悼み、浄心門からは2号路の、南斜面特有の暖温帯極相林のスダジイ・アカガシ・カヤ・サカキ・カゴノキなどを観察して琵琶滝に到着。その後清滝駅広場で解散となりました。

平均年齢が70歳の参加者ですが、健脚で全行程8kmの道のりを6時間かけて無事に完歩しました。

🌸 第16回森林は友達！作文コンクール表彰式開催される



受賞者の記念撮影

3月8日(金)、関東森林管理局東京事務所と(社)東京林業土木協会主催の作文コンクール表彰式が、江東区のホテルイースト21で行われました。1都6県の小学4～5年生1500余名が、森林管理署やセンターの森林教室で学習・体験したことを作文応募した中から、長官賞をはじめに表彰したものです。

最優秀賞の長官賞には、伊豆市立修善寺南小学校5年生の小川舞也君の「自然界の母なる木ブナ」が選ばれました。当センターの受講者では、多摩市立連光寺小学校の岡田健太郎君が、「木のすばらしさ」で優秀賞の東京事務所長賞を受賞しました。

応募作品の全てが子供なりの純粋な感性があふれたもので、次代を担う子どもたちが森や自然の大切さを思う心が伝わりました。

春の高尾山親子自然観察会



森林インストラクターと高尾の森を歩いて、新緑の森からパワーをもらい、木や花の名前を覚えて小天狗の仲間入りをしよう。

- と き** 平成25年5月18日(土) 9:00～15:00
集 合 高尾森林ふれあい推進センター
受付開始 8:30
実 施 森林インストラクター東京会(FIT)
コ ー ス 高尾森林ふれあい推進センター～6号路～琵琶滝道～霞台～4号路～もみじ台(昼食)～山頂～1号路(薬王院境内)～林野庁慰霊碑前広場(解散)
対 象 者 小学生とそのご家族50名
(未就学児童の参加はご遠慮ください。応募者多数の場合は抽選になります)
参加費 1人500円
持ち物 リュックサック、昼食、飲物、敷物、筆記用具、雨具、保険証、ルーペ、双眼鏡、活動しやすい服装、運動靴、帽子、着替え
備 考 雨天中止(小雨決行)

申込方法

往復ハガキの往信面に、参加者全員の①郵便番号②住所③氏名(ふりがな)・年齢・性別④電話番号(中止などの緊急連絡用)⑤電子メールアドレス⑥このイベントを何でお知りになったか。返信面には、お申込者の宛名をご記入のうえ、高尾森林ふれあい推進センター「春の高尾山親子自然観察会」係までお申し込み下さい。

★申込〆切 平成25年4月25日(木)必着



編集後記

平成25年4月1日、組織の再編に伴い、高尾森林センターは「高尾森林ふれあい推進センター」に名称が変更されます。名前も変わり心機一転、高尾山の自然や森林、林業に理解を深めるための活動をさらに充実していきますので、これからもよろしくお願いします。(ま)



日影の森だより

ある日、高尾森林センターに来所された一般のお客様から、気になるお話を伺いました。その方は何年もの間、裏高尾と呼ばれる日影沢、木下沢(こげさわ)に出かけて、チョウ類の観察を行ってきたのですが、ここ数年、自然観察シーズンが訪れるたび憂鬱になると言われるのです。

その憂鬱の原因は、昆虫類を片端から採集する、「昆虫採集者」との出会いなのだそうです。この2年ほどは同地へ訪問するのを控えているということでした。

チョウの出現がたけなわの休日には、狭い林道が、「捕虫網」を持った採集者で賑わいます。特にミヤマカラスアゲハ、カラスアゲハなどの大型チョウがターゲットとなっているそうです。その上、近年見逃せないのが、「生きた化石・ムカシトンボ」までもが採集されていると、トンボ研究者からも声が上がっているそうです。このトンボは、全国的に生息地が限定されている貴重な種です。それがむやみに採集されているとは由々しき問題だと憤慨されました。

高尾山一帯は全国でも有名な昆虫生息地ですが、シーズンには山野草、鳥類、昆虫類の観察が行われている傍らで、昆虫マニアが傍若無人に捕獲しているようです。世界中で生物多様性が叫ばれている今、高尾山でも何らかの保護手段を講じなければ、貴重な生物相は取り返しのない事態になってしまうと、沈痛な面持ちで訴えて帰られました。

都心から電車で1時間の手軽さもあり、毎日大勢の登山客が自然の豊かさや安らぎを求めて、高尾山を訪れます。昆虫を含め、この豊かな自然が100年先、さらにその先までも残せるよう、最大の受益者である地元地域の関係者が、危機意識をもって具体策をとる時機にあります。



Forest通信 No.293

発行:高尾森林ふれあい推進センター

Forest通信へのご意見・ご要望・イベントのお申し込み・お問い合わせ先

林野庁 関東森林管理局 高尾森林ふれあい推進センター
〒193-0844 東京都八王子市高尾町2438-1

TEL 050-3160-6040 FAX 042-663-7229

<http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/takao/index.html>

